
桜草

元樹

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜草

【Nコード】

N5065C

【作者名】

元樹

【あらすじ】

主人公の田村真司はなにも変化もない学校生活を送っていました。ある日どこか懐かしさを感じるそんな女の子が転校をしてきて、そして昔止まった歯車がゆっくりと動き始める

第一章 はじまり

それは大体春の陽気に溢れている4月の末ごろだった。

まだ春は出会いと別れの季節だという感覚がなかったころだ。

「さっちゃんきょうはぼくをあきちによんでどうしたの？」

あの頃の自分は幼かったためそこにあった悲しい雰囲気気づかず何か楽しい事や何かを発見したんだと思い、ただ純粹に聞いている。

今思うとすごく残酷なことを聞いていたんだと思っている。

彼女は俺にそう聞かれるととても泣きそうな顔をして、

「しんくんにさよならをいいたくてよんだんだよ」

そういうと涙を流しながら悲しげに微笑んでいた。

ギリリリン ギリリン

パツチ

俺はまだ眠たかったが目覚まし時計がうるさく、頭が覚醒してしまった。

「ん・・・もう朝か・・・まだねむたいな・・・それにしても懐かしい夢見たな・・・」

覚醒は微妙にはしたのだがまだ少しぼーっとしていると窓の外から近所迷惑になりそうな大きい声が聞こえた。

「おい、起きているか！」

「はいはい起きているからそんな近所迷惑な大きさを俺の名前呼ばないでくれ」

俺は言いながらドアの前にいるそいつを睨んだが全く気にもしていない。

「それならさっさと着替えて降りて来てくれんか？あまりわしを待たせるな」

そいつはさつきと比べて声の大きさをさげてはいたが、自分勝手な事を言っているため俺の気は晴れなかった。

そいつは相良^{さがら} 健二^{けんじ}といい、なんか知らないが高校一年のころにちよつとしたことがあって、友人となつてから家が近くもないのに学校がある日は毎回毎回起こしてくる。

俺的には凄く男に迎えに来るのは微妙な気分だがな……

だがやはりそれでも人を待たせるのは凄く抵抗があるため、特技の早着替えを活用してちゃっちゃと行く準備を整えた。

着替え終わって、部屋を出て、駆け足で居間に向かい、両親が海外にいるため、いつものように前日にスーパーで買って用意しておいて居間のテーブルの上に置いておいた昼飯セット（パン二つとペットボトルのお茶）を鞆の中に詰め込み、家を出た。

出てすぐ待っていたのは「おそい……」という健二の非難めいた言葉だった。

かなり頑張つて急いだのにその言葉はあんまりなんだが……俺が拗ねたのを気づいて少し反省したのか苦笑いを浮かべたがすぐまじめな顔になると

「まあいいが……と話している場合じゃない。早く行く」

健二は少し焦り気味に言った。

あれ……部屋の時計を見たときにはまだ三十分も時間あったはずだがな……と思いながらもかなり嫌な予感をしたため、ポケットの中に入っていた携帯で時間を確認して、俺は固まった。

まあ健二がすぐ俺の頭をこついたため、すぐ戻されたが……

「なあ……？これは何かの間違いか？」

俺はもの凄くすがりたい気分で問いかけたが、

「真司^{しんじ}、現実、間違いなく走らないと遅刻する」

と返され、必死に走ることが決定的になり、俺たちは急いで学校に向かうべく走り出した。

「うおおおおお！」

俺達が住む時雨町自体坂が多い土地柄で、俺達の通う睡蓮高校は俺の家から歩いて二〇分だがその坂で最も急坂の上にあるため、こうやって叫びながらじゃないと走る気もしないほどの道のりだ。

俺の少し前を健二があまり疲れない様子で走っていて

「なにへばりかけているんだ？」

と余裕がまだまだあるようで俺に普通に声かけてくる始末。

「お前ほど運動神経がないんだ！お前はバケモノか！」

というわけで悔しいのでバテながら頑張っって言い返したりもしているが、健二はただ涼しげな顔をして走っていった効果無し。

健二運動神経良すぎだし頭もいいし、こいつは本当に化け物なのかもしれない…と自分のこの疲労具合と健二の疲労具合の違いについて最もらしい言い訳を、頭の中でしつつ、走っていると坂に終わりが見えてきて、俺たちの通う高校の校門が見えてきたので、俺は最後の力を振り絞りいつもの要領で、校門を通り過ぎ、下駄箱まで素早く行き上履きに履き替えると教室のある3階まで階段を二段飛ばししながら登り廊下を走り抜け時間までにドアを開けることに成功した。

「ぜえぜえ…ま…に…あつ…た…」

やっぱり息のあがった状態だと声を上手く出せずに肩で息をしていると少しドアの近くの席に座っていた女子がこっちを向いてすこし微笑みながら

「真司今日はめずらしく遅刻ぎりぎりだったね。はいはい息を整えて。」

こっちに向かつて歩いてきてドアをあけたまま止まっていた俺を教室の中まで引っぱりこんだ後、その女子が俺の軽く背中をさすってくれているときに俺が入ってきたドアからニヤニヤとしながら健二が登場して、俺達の横を通り過ぎると

「いつもながら仲がいいな ご両人」

俺をさすっていった女人の前に立ち、そのニヤニヤした顔を向けて言った。

向けられていた方の女の子は健二を少し眉間にしわを寄せて睨みつけるような目で見つめ

「そんなんじゃない！馬鹿健二のくせに変なこと言うな！」

「こんな純粹無垢の男に向かつてなにを言うんだ？」

健二がすぐそんなことを言うと言った彼女が疲れたようにため息をつき

「それすごく嘘っぽいよ？」

とすごく疲れた感じで言った。

俺はそのやりとりをその女子の横で少し笑いながら見ているという傍観者の立場に立つという一番安全な立場に立っていた。

この女子は西原にしはら 葵あおいといい、高校一年生の頃にある出来事がきっかけで仲良くなり、友人となった。

毎回二人を見て思うんだが俺の友人の二人は両方とも顔立ちがきれいに整っており、健二は身長も高く顔はシャープな感じで葵はどこぞのアイドルのように顔で非の打ち所のない美人であるため二人ともそれぞれの一年の頃の出来事無ければ友人になることも無かったと考え事をしていると

「ねえ真司ばくとしてどうしたの？」

といつのまにか会話が終わっていたのか、葵が俺の顔を近くで覗きこみながら、心配そうに言った。

「ああすこし考え事をね ほらもうすぐチャイムが鳴るから！」

少し恥ずかしくなったため誤魔化して会話を变えようとしたがタイミング良くチャイムが鳴り、葵は元の自分の席にしぶしぶ戻っていた。

その様子いつの間にか自分の席に座っていた健二が微笑みながら見ていたのを気づいて、さっきよりもなぜか恥ずかしくなって俺も急いで教室の一番後ろの窓際にある自分の席に座った

俺が座ったと同時に男の担任が教室に入ってきた。

「全員おるか？遅刻者はおらんか？」

とバンバン教卓を出席簿で叩いて騒がしかったクラスを静かにさせようとしたため騒がしかったクラスの中が少しずつ静かになってい

った。

それに満足したのか。小さく何度も頷き話を再開した。

「ここで出席を取りたいがその前にやらないといけないことがある。ほら入ってきなさい」

担任の言葉にせっかく静かになったクラスがまた騒がしくなった。だが健二だけは事前に知っていたのか知らないがただニヤツと笑いながらドアの辺を見つめるだけだった。

そう周りを見ていると

「じゃあ入ってきなさい」

という担任の声でドアがゆっくりと開く音がしたのですぐさまそっちに目を向けた。

そして綺麗な女子が軽く頭を下げて教室に入ってきて、担任の横に立つとクラスは静まった。

その女子は、髪は背中にかかるくらい長く顔は葵と比べてもほとんど差ないくらい整っており、背は低めの身長をしていた。

「ほら自己紹介をしたまえ」

と担任に急かされると緊張気味に、

「今日から2 Bのみなさんと勉学を一緒にさせて貰います。近藤こんどう早耶そづかです。どうぞよろしくお願いします」

とまた深々と礼をすると同時に静まっていたクラスが勢いよく盛り上がった。

特に男子が特に綺麗な子が増えるためその勢いの度合いはもの凄かった。

「えつと近藤はこの席がいいかね………そういえば田村、お前の席の横空いていたよな？そこを席にしようか………いいか？近藤」

俺の席の方を担任が指をさしてそういうと近藤さんは軽く頷き承諾をすると健二以外の男達からなぜか嫉妬や恨みをこめた目で睨まれることになった。

なんで俺が睨まれる羽目にあうんだ・・とそう思いながら下を向きながら深いため息をついた後、再度顔を上げると、

いつのまにか近藤さんが目の前におり、微笑みを浮かべていた。

「田村君よろしく願いますね。」

近藤さんはどうやら俺が顔を上げるのを待っていたようで俺の方にちゃんと挨拶をした後

「あと近藤今日教科書あるか？ないのなら田村に見せて貰え、あと学校の質問はすべて田村にきいてくれ」

という担任のなぜか責任逃れにも似た言葉が聞こえてきた。

近藤さんは担任の言葉に小さく頷くと指定された俺の隣の席に座った。

今後どうなるんだろうとあまりにも漠然的なことを思いつつ、それでも何事もなく過ごしたいなと呑気なことを考えていた。

だが、まだこのときの自分はまさかこの出会いをきっかけにあんなことになるとは夢にも思いはしなかった。

第一章 はじまり（後書き）

はじめまして元樹です。まだまだだめだめな点が多々ありますがどうか温かい目でみてください

第二章 友人

「ふあゝ」

俺が朝のホールルームが終わって欠伸をして長く伸びをしていると、

「あの・・・」

「え？なに？」

隣から声をかけられたので少しびっくりをしながら体ごと声がしていた方に向けると少し申し訳なさそうに顔をしてこっちに席に座ったまま顔を向けている近藤さんがいる。

（まあ今隣の席に座っているのは近藤さんしかないけどね）

と思い少し苦笑いを浮かべてしまったが、近藤さんはそれに気づいた様子もなく、

「申し訳ないけど私教科書がまだ届いてないから良かったら教科書を見せてほしいんですけどいいですか？今日着たばかりだから田村君以外には頼みづらいですからお願いします。」

「そんなのでよければいいよ。」

近藤さんに頭も下げられてしまったので、俺は断れるはずもなかった。

そついうと近藤さんは嬉しそうに笑い、

「ありがとうございます。じゃあ机をくつつけましょうか。」

と近藤さんは自分の机を持ち上げ、俺の机の隣に付けた。

「あ、うんわかったよ」

俺はその様子を呆然としながら、机をくつつけられると遅れながらもそつ返事をしていた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

キンコーンカンコーン

「はぁ・・・やっと昼だ・・・」

俺は4限目の授業が終わるチャイムが鳴ると同時にだらけた。

「あの？大丈夫ですか？」

その様子を教科書見せるために机をくつつけている関係で近くにいる近藤さんが心配をさせていた。

「心配しなくても大丈夫だよ」

俺は心配させまいと顔を少しあげて、微笑んで見せてもまだ少し近藤さんは心配そうな顔をしていたが、

「そいつは心配しなくても大丈夫」

いきなり現れてそんな発言をしたのは健二で、

「近藤さん、そうだよ」真司はいつもそんな感じだからさ」

その健二の後ろから顔を出してそうだったのは、葵だった。

「ひどいな・・・いつもいつもそんな感じだとか思われちゃうじゃないか。」

俺はその二人が出現したもんだから急いで上半身を上げ、少し不機嫌気味にいつてみたが

「でも本当のこと」

健二に即座に否定をされ、その言われた事を言い返すこともできず、（否定することもできないのはむなしい・・・）

とか思うことしかできなかった。その様子を少し傍観していた近藤さんは、

「皆さん、仲がよろしいんですね」

「まあ（ね）真（司）と友人やれるのわし（あたし）たちくらいしかない（からね）」

近藤さんが微笑を浮かべながら目を細めていわれた健二と葵は最初に少し苦笑いを浮かべてから二人同時にうんうんとうなずきながら言っていた。そして言っていることが重なった二人はそれにびっくりしてまた苦笑いをしていた。

その答えに満足したのか、近藤さんは少し楽しげに笑っていた。

近藤さんの様子を見ていた葵は、なにかを思い出したように視線を近藤さんから俺のほうに移して

「そつえば、真司にご飯のお誘いに来たんだよ」

と二カツと笑った笑顔を浮かべて言った。

「もうよければ近藤さんも一緒にご飯食べないかな？あ嫌なら別に断つてもいいんだよ？」

俺はその言葉を聞きちよつとしたことを思い付いたのでそれを提案することにしたが最後にはなんか不安になったので自分をフオロ―することにした。

「私なんて入れてもらつてもいいのですか？」

「うんいいですよ」

「大丈夫」

近藤さんが申し訳なさそうに言うのと即座に答える二人を見てやつぱり俺の友人だと改めて思った。

「ありがとうございます。お言葉に甘えさせてもらいます。」

近藤さんは嬉しげに笑いながらそういった。

「じゃあ早く準備しないとね」時間がもつたないから健二と真司あと二つ机と椅子持つてきて！」

「あいわかったよ」

「わかった」

葵にこつき使われるのはいつものことなので俺たちはそういい俺の席の周りのところからお互い1セットずつ持つて葵の所まで向かった。

「はいおかえり」

「お二人ともお疲れ様です」

「ただいま帰りました」

「ただいま」

俺たちは定番（？）のあいさつを交わすとすぐ小学校で給食を食べるときみたいに机をつなげた。

「さて各自さつさと座ること！近藤さんあたしの隣ね」

俺はそういわれるといつものとおり健二が座った席の隣に座り、葵は近藤さんを手招きして、近藤さんは戸惑いながらも葵の隣の席に座った。

「ねえねえ近藤さん！早耶ちゃんと読んでもいい？」

「はい、いいですよ」

「じゃあ早耶ちゃんね！あたしは西原葵だよ！だから葵でいいからね」

「それでは葵さんと呼びますね」

近藤さんが弁当を出して開けようとしている時にいきなり隣の葵にそんなお願いをされてびっくりしたようだがすぐ冷静を取り戻し、嬉しそうに会話をしていた。

俺はその様子を横目に見ながらかばんから朝昼兼用となったパンを出して袋の口を切った。

「わしは相良健二。健二と呼ばばいい」

「はいわかりました。健二さんと呼びします。あの田村君はなんと呼びしたらよろしいですか？」

「え？俺？じゃあ下が真司だから真でも真司でも何とでも呼んでいいよ」

おれはいきなり話を振られたもんだからかなりびっくりしながらもなんとか会話をする事ができた。

「それではそうですね・・・真司さんと呼びすることにします。それで健二君と蓮君は私のことを早耶と呼びしてもらって結構ですから」

「じゃああたし達が早耶ちゃんのこの学校で初めての友達ということで！」

「そうだな」

「真司もそれでいいよね？」

「え？そうだね。もう早耶さんの友達だよ」

早耶さんに下で呼ばれることになぜか凄く懐かしさを感じていたが葵にそう声をかけられたもんだから急いで返事を返した。

「みなさんありがとうございます。改めてよろしく願います。」

「早耶ちゃんよろしくね」

「よろしく」

「うんこちらこそよろしく」

みんな笑顔でそう言いあっていた。

俺がなにげなく教室にかけてある時計に目を向けたのだが・・・

「あ・・・ってもう昼休みがもう半分くらい過ぎているじゃないか！？」

「え？そうなの！？もう食べなちゃ！ほら早耶ちゃん早く食べよ」

「そうですね。食べましょうか」

「そうだな」

俺が時間をかなりすぎていることに気づきその事をいうとみんないそいそと手を止めていた食事を再開し始めた。

「それにしても真司のご飯なんかとても貧相だね～ちゃんともっと食べなっちゃいけないよ？」

「これで十分なんだよ。あと準備する時間もないし」

「真が朝ぎりぎりまで寝ているから時間が無い」

「いいんだよ。俺は食事より睡眠の方が大事だから」

俺はそう言い切ると今食べているパンを残っている部分を全ていっきに口の中に放りこみ自分が使っている机においてあった紙パックのコーヒー牛乳を取り、流し込んだ

「ゴクゴク。ふう～終わり！」

「そのようにいっきにお食べしたら体に悪いですよ」

早耶さんは食べている最中の箸を止めてそう注意してきた。

「早耶さん心配しなくても大丈夫だよ。」

「ですけどなるべくしないでください」

「ん～分かったよ。今日初めて会ったばかりなのに心配してくれてありがとうね」

「そんなの関係ないです。学校きて始めての友達なのですから」

そう言う少し照れ笑いを浮かべて、止めた箸を動かし始めた。

キンコーン カンコーン

俺たちはその後も食事を食べながらもしゃべっているとチャイムの音が鳴り響いた。

「そういえばすっかりずっと話していたね」

「そうだね」

「早く机を元に戻しましょう。」

「それがいい」

そそくさと机を元の場所に返し、俺たちは元の席に戻っていった。

「真司さんありがとうございます」

「ん？なにが？」

「少し短すぎましたね。昼を誘って頂き本当にありがとうございます。あとお友達なっていただき本当にありがとうございます」

「そうしたかったからしたんだからいいんだよ。こちらこそ友人になってくれてありがとうね」

そういうと早耶さん照れ笑いを浮かべていた。

（それにしても早耶さん本当にきれいだな）

「もう授業だから静かにしてください。」

すこしそんな事を考えているといつのまにか限目の先生が入ってきていた。

「真司さん午後もよろしくお願いしますね」

「うんもちろんだよ」

その会話をして俺は黒板の方に顔ごと向けた。

.....

「今日はやつと終わった・・・」

「お疲れ様です」

俺は帰りのホームルームが終わると同時にへばると早耶さんから劳いの言葉を貰った。

「そこ！昼みたいにはばらない！」

「お前駄目すぎ」

「昼と同じで二人酷いな・・・」

友人二人は昼と同じように俺に対して酷い発言しながら出現をした。

「なあ、友達に劳りの心を持つという気持ちがない？」

「「まったくない（よ？）」「」」

「悲しくなるからハモらなくてもいいから・・・」
俺はため息をつきながらおもわず頭を抱えた。

第二章 友人（後書き）

ああ・・・まだ一日が終わりませんね
見直しが不十分な点ありますのでなにか気づいたら終えてください

第三章 雰囲気（前書き）

更新遅くなりすみませんでした

第三章 雰囲気

「馬鹿やってないで早く帰ろう!」

「苦しい・・・ちゃんと行くから離して・・・」

「じゃあちゃんと追いついてくるんだよ!」

俺が頭を抱えたらすぐに葵が俺の服の襟を掴んで動かそうとしていたため、それがもろに入り苦しそうに返事したがそれを気にした様子無くすぐ離して教室を出て行った。

「わしもついて行く」

「じゃあ早く行こ」

葵に着いて行く感じで健二がついて行き、葵は返事だけして後ろを振り返らず教室出て行った。

「真司さん大丈夫ですか?」

「心配してくれるの君だけなんだね・・・」

「真司さんどうしたんですか?なんか涙流していますし」

「う、うつんなんにもないよ」

俺が感動の涙を流していたら心配されてしまい、慌てて否定した。それでも早耶さんは心配なのか、「本当ですか?」といって顔を近くに寄られて覗き込まれ、かなり緊張して一時じっと見てしまった。

「え、あ、だ、大丈夫だよ」

「本当に大丈夫ですか?」

「本当に大丈夫だよ。だから早く行こう葵達たぶん下駄箱で待っているし」

「本当でえ、分かりましたから、だから押さなくてもいいですよ。」いきなり覗き込まれたからかなり慌ててしまい、かなりうわずった返事になったので早耶さんは、やっぱり心配そうな顔をしていたが不自然だが話を変えてまた聞き返そうとしたのを無理矢理回れ右させ、背中を押して話を終わらせた。

「無理矢理押さなくても良かったじゃないですか・・・」

「ごめんね。だから機嫌なおして欲しいよ」

無理矢理話を終わらせるように背中を押したのがいけなかったのか教室を出る時には少し怒ったようで、そのまま歩き始めたので俺も追いつき、その横に並んだ。

彼女の顔をちらっと見たのだが、

（怒っているようだけどまったく怖く感じないのが不思議だな）

「なにがおかしいですか？」

「いやいやまったく可笑しくないよ。本当にごめんね」

俺自身が気づかぬうちに少し笑顔を浮かべていたのか、突っ込まれてしまった。

だがまあ謝っても顔が緩んでしまつて自分自身さえこの状態じゃ謝つていても説得力ないのは、まるわかりだ。

もうその俺の様子見て諦めたのか、「もういいです」っと少しため息まじりで言われたが早耶さんの顔は笑顔を浮かべていた。

もう怒つてないのを確認したので、昼の時に思った疑問をぶつけることにした。

「早耶さん昔会った事あるかな？」

「え・・・」

俺はすぐに会った事ないと答えると思つていた予想と違い、早耶さんは表情が固まった。

「どうしたの？」

「あ心配しなくても大丈夫ですよ、それよりも会ったことないですね」

俺が聞き返すとその表情は戻り、一瞬だけ寂しそうな顔をしてからすぐ笑顔を浮かべた。

俺はそれを見てこれ以上聞き返す事を憚られたため、「そうか」と言つた後すぐに話題を変えて話を続けていった。

その後は、早耶さんと下駄箱に着くまでたわいもない話を続けていき、その中にはさっきのような事は起きなかった。

「遅いよ〜早く来てっていったのに！」

「葵遅れてごめん！」

「まあ許してあげる〜」

俺たちが下駄箱に着くと葵が健二の横で不満そうな顔を浮かべていたので瞬時に謝ったため葵はすぐに許してくれた。

「そつえば真司と早耶ちゃんだいぶ仲良くなっただね〜」

「そうか？まあ少し話しながら来たからほんの少しは仲良くなったかもな」

「そうかもしれないね」

「でも不思議だな〜今日初めて会ったはずなのに真司と早耶ちゃんの場合なんか自然な感じもしていたかも」

「確かにそうだ」

健二の言葉に葵と健二の二人は何回も頷いていた。

俺はさつき葵から言われた言葉にかなり不思議な感じを感じて

（そんな自然といわれるほどの雰囲気出していた気しないんだが・
でも否定もなぜかできない・・・）といろいろな考えを巡らせていた。

「みなさんここで止まらず、早く行きましょう」

「そうね〜じゃあ帰ろうか！二人も帰ろう！」

「ああ分かったよ」

「了解」

その考えを巡らせている最中に突然横で声がしてビックリしたため横を見ると早耶さんが帰ろうつと少し大きめな声で言っていたことに気づき、すぐに葵に同意求められたためちよつと不自然な返事になった。

靴を履き、話をしながら四人で校門を通り過ぎようとする辺とこ
ろで葵が何かを気づいたのか早耶さんを黙って覗き込み、そのまま話を再開した。

「そつえば早耶ちゃんは家どこら辺？」

「私ですか？ここの通学路の坂を下った所の途中ですね」

「じゃあ一応途中までは私たちと一緒に帰れるね」

その事実が嬉しいのか覗き込んでいた顔を前に向け、葵は嬉しそうに笑顔を浮かべており、早耶さんも嬉しいのか、同じように笑顔を浮かべていた。

それから嬉しそうな顔を浮かべながら二人は話しを続けている。おれたちというと健二は葵の隣でその様子を眺めており、俺は早耶さんの隣でその様子を横目でみながら、天気がいい空を眺めていることにした。

葵達女性は俺たちに挟まれて守られている感じで歩いていた。

「私この道に入らないといけないですから」

「そつかまたね」

分かれ道に入るようで早耶さんは前に出て自分が入る道に指を指した。

俺はそのまま手を振っていたのだが。

「ねえ！今水曜だからまだ早いけど早耶ちゃんが来た歓迎会を三人でしたいから今度の日曜日あけといてくれないかな？」

「え、聞いていないぞ？」

「わしもだ」

「もう決定事項だからにも言わない！」

「という訳でいいかな？」

「大丈夫ですけど健二さんと真司さんのことはいいんですか？」

「大丈夫よね？」

いきなり葵が大声で呼びかけたのもビックリしたが歓迎会をするなど言い始めてそれ以上にビックリしたのだが後ろ振り返った時の顔は「無理とはいわないよね」という事を物語っているため俺たちは、「はい」という返事しかできなかった。

（まあ全く反対しないんだがいきなり決められるのは困った物だ）
つと思いつつ小さくため息をついた。

「そついうことだから空けておいてね！」

「はい分かりました。みなさま、また明日会いましょう」

「ああまたね！」

「早耶ちゃんまたね〜」

「また」

早耶さんが会釈をすると俺たちは笑顔で手をふった、そして道に入り、見えなくなってからまた帰り道を歩き始めた。

歩き始めてすぐ葵は少し暗そうな顔になって顔を下に向けた。

「ちゃんとした友達になれるといいな・・・」

「なれるさ・・・」

「あたし達のある事情知ったら目の前を去ってしまいそうで怖いな・・・」

「きつと大丈夫さ！」

「大丈夫」

「ありがとう・・・」

俺たちの言葉に葵は救われたのか、顔を上げ、微笑みを浮かべた。だがそれでもやっぱり少し不安なのか、ちょっと無理して微笑みを浮かべているように思えた。

その後葵は無理してテンションをあげたように、俺たちそれぞれが別れる道までずっとしゃべり続けており、俺がつっこみやいろいろ合いの手をいれ、健二は頷きながら話を聞いていた。

葵達と別れて自分の自宅に帰宅し自分の部屋に入ってから制服も着替えずベットのの上に座ってずっといろいろな事を思い返したり考えたりを繰り返すばかりだった。

第三章 雰囲気（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました
これから更新スピードあがるように努力します。
小説の人物達にも夢で怒られましたしw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5065c/>

桜草

2010年10月10日14時48分発行